

空手道詳説（25）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

（4）敗北の結果

① 薩摩軍の凱旋と戦後処理

1609年（慶長14年）2月6日（太陰暦）、鹿児島山川港に集結し、3月4日琉球へ向けて出発した薩摩藩軍団は、5月15日には尚寧王、摂政、三司官らの高官100余名を捕虜として連行し、那覇港を出帆し山川港に凱旋帰還した。

尚寧王は、琉球国をこのような運命に陥れたのは、第二尚氏初代の尚円王の妃・宇喜也嘉が、尚円の死後、世子の我が子尚真が若年であるとの理由から第二代王になれず、尚円王の弟・尚宣威が第二代王となったのを恨み、策略を弄し、尚宣威王を在位5か月にして廃位に追いやり、尚真を第三代王に即位させた。

その後、尚真王が王家の墓陵「玉陵」（タマウドウン）を建造したとき、宇喜也嘉は「玉陵の碑文」という玉陵に葬られるべき者の名を記した碑を建てさせた。その碑文には、尚宣威の血縁者はなく、反すれば祟るという呪い文があった。

尚寧王は尚宣威から数えて5代後の子孫の当たるため、自分が王位に着いたことにより国難が生じ、悲運を招いたと考え大いに悔やんでいた。正直な人だと思う。

幽閉の身となった尚寧王は、翌1610年には薩摩藩初代藩主となった島津家久（1576～1636年、初名は忠恒）と共に江戸へ向かう。

途上駿府で大御所の徳川家康と謁見し、8月28日には江戸城にて第二代将軍・徳川秀忠（1579～1632年、在位：1603～23年）と拝謁し、混乱を招いた非を認め謝罪した。戦勝国と敗戦国の立場が、これによって明確となった。（右の絵図は、島津家久）



更にこの席で、島津家久は琉球の支配権を将軍から承認された他、第一尚氏王統最後の王・第7代尚徳王の時代の1462年以降、事実上琉球領となっていた奄美諸島を割譲させ、直轄地とすることを許された。

幽閉の身となってから2年4か月後の1611年9月、尚寧王以下の摂政、三司官は『琉球は古来より島津氏の附庸国である』と述べた起請文に署名を求められるが、これは囚われの身になっていた尚寧王他の帰国を許す条件でもあった。

ところが、三司官の一人である謝名利山〔(じゅなりざん、1549～1611年、通称は謝名親方(じやなうえーかた)。以下、単に「謝名」と記す)〕は署名を拒み続け処刑された。

また、琉球の貿易権管轄などを書いた「掟十五条」を認めさせられたため、琉球の対外国貿易は薩摩藩が管轄することになった。

このようにして、薩摩藩は第二尚氏王統を存続させながら、那覇に薩摩藩士が交替で常駐する「在藩奉行所」を置き、明治維新まで琉球を間接支配することになった。

それは、外見的(あるいは外交的)には明朝(1644年からは清朝)との朝貢関係を保持しつつ、以降、年貢や特産物の貢納という負担をはじめ、事実上は薩摩の属藩(あるいは支藩)と全く同じ立場に置かれた。

明治新政府の時代になって、琉球藩の設置(1872年)、更には琉球処分(1875年)、沖縄県の設置(1879年)へと矢継ぎ早に大勢の変化が続き、長く苦難の道を歩む宿命を背負わされたのである。

日本側の見方からは、謝名は尚寧王の佞臣(こびへつらう家臣)であるとともに、異常な偏執(偏見を固執して他の意見を受け付けない)さと剛愎(気が強くて人に従わないこと)な性格の持ち主で、琉球王国の立場を悪くしてしまったのではと考えられている。

② 謝名利山処刑までの経緯

謝名の先祖を辿れば、1372年に察度王が明国と初めて朝貢関係を結び、1392年に明朝から遣わされた「閩人三十六姓帰化」と呼ばれる学術・技術等の移民集団は琉球国の発展に大きく寄与したが、その中の一家系、鄭氏湖城殿内(ていじこじょうとうんち)が初代である。

謝名は、湖城殿内から数えて8代目、鄭禄(ていろく)の次男として生まれ、唐名は鄭廻(ていどう)だ。謝名とは、今帰仁の一地名であるから、後にその地を領地としていたための名乗りである。

1565年、16歳にして明への官費留学生である官生に選ばれ、隋代以来続く中国の最高学府「国子監」(南京)に学び、7年後の1572年帰国した。

謝名は、6尺豊かの大男で、色浅黒く、しかも琉球「手」（ティー）の達人であったと伝えられている。しかし、そもそも湖城家は中国拳法を巧みとし子々孫々に伝えた家柄であり、「国子監」への留学もあるから、南京でも拳法を学んだ可能性も否定できないため、純粋な沖縄手であったかどうかは分からない。また、方術（仙人が使う技）にも通じていたとの口碑もある。

その後、王府の主要な地位に就いて活動を続けるが、この項の冒頭で記した「薩摩藩侵略のプロローグ」の中で、1602年に琉球船が仙台藩（伊達藩ともいう）内に漂着した一件である。

この船は、太平洋側を北上する内に方向を見失って漂着したもので、国に帰る海路が分からない様子であった。仙台藩にすれば琉球の事情に詳しい者はいないし、取りあえず徳川家康に伺いを立てれば、南方事情に詳しい薩摩に伝手をつけてくれるだろう、程度のことかと思う。家康は関ヶ原の戦後処理に追われ、伊達政宗も未だ天下取りを諦めていなかった時期のことである。

翌年になり、後陽成天皇から征夷大將軍に任命され、江戸に幕府を構えた家康は、薩摩に命令を発し、その誘導によりて琉球船は無事送還されている。

琉球に無事帰還したからには、当然のこと口を利いた家康に礼を尽くすべきと薩摩から促されるが、尚寧王はこれを無視し、応じようとしなかった。無視した裏には、謝名の上奏があったからであった。

1605年には、能書家で親日本派の三司官・城間盛久（ぐすくま せいきゅう、1542～1522年）を尚寧王に讒言し、城間を百姓の身分に貶め、その翌年謝名自ら56歳で三司官に昇進している。謝名は稀に見る策士家のように思われる。

また、1608年には、家康が琉球に向け侵攻の水軍を起こそうとしているのを察した島津家久は、琉球国に大慈寺龍雲を派遣し、尚寧王に対し家康に恭順するよう諭すが、家久の勧告に対し謝名は全く理解を示さないばかりか、使者の僧を侮辱して辱めたのは既述のとおりである。

1609年、侵攻を受けた際の利山は、3000人の兵を率いて久米村に立て籠り、3日間にわたって那覇港を閉鎖して抗戦したが及ばず、遂に首里城を目指して逃げ延びるところを捕えられたとか、山中に逃げ込んで降伏しなかったのを探しだされて囚われの身になったなどの諸説あるが、真実は分からない。

前項で書いたように、尚寧王以下の摂政、三司官は、幽閉から2年余りを経て、帰国の条件として『琉球は古来島津氏の附庸国である』との起請文が提示され、これに対し尚寧王を始め署名に応じることになったが、謝名一人だけ種々抗弁してこれに従わず、同日の内に斬首の刑に処せられた。

また、異説ながら謝名は斬首でなく「釜ゆでの刑」で、警護の当たっていた警吏二人を両脇に抱え込み、一緒に煮えたぎる釜に飛び込んだとある。これは、謝名の並はずれた怪力と執念の強さを伝えたものと思われる。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和 43 年 11 月 26 日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970 年 9 月 1 日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和 50 年 7 月 25 日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012 年 6 月 20 日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011 年 6 月 25 日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686 年 4 月 25 日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005 年 12 月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他 31 名、昭和 52 年 3 月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和 47 年 4 月 20 日初版、閣文社発行